

## 遺構（建物について）

池田家（いけだや）の建物はヒノキで作られ、伝統的な木組み工法のみが用いられている。現在同様、正面の通用口は日常的に使われていた。徒歩で到着した飛脚や商人たちは低いくぐり戸から入っていったが、米や毛織物などの商品を積んだ馬や荷車が入れるよう、扉全体を開くこともできた。貨物は土の敷かれた場所で下ろされ、そこで記録を付けたのち、後ろにある倉庫へと運ばれた。2階には一般旅行者と商人向けの宿泊部屋が5つあった。建物全体では全部で12の宿泊部屋があり、この地域では最も規模の大きい宿であった。

伝統的に、商売は覆いのない炉床（囲炉裏）で行われた。囲炉裏の後方の壁には、神道のあらゆる神を祀った神棚がある。通用口の向かい側、囲炉裏の後ろにあるのは、伊米（いめ）神社に祀られている食物の神・保食神（うけもちのみこと）を祀った神棚だ。その下にある鯨のヒゲは、その希少さから幸運を願って吊るされていたと考えられている。隅には別の神棚があり、太陽の神である天照大神（あまてらすおおみかみ）が祀られている。

神棚の正面には古いスズメバチの巣が吊るされているほか、さらに小型の巣がもう1つ通用口のところに吊るされている。これらは、商売繁盛と子孫繁栄のお守りとして使われていた。

壁に掛けられている武器は、関所を守る役割もあった村の名主の立場として使用していたものだ。江戸時代（1603～1868年）、武器庫には犯罪人を制圧し、捕らえるために使用する3つの特殊な武器があった。頭部がT字型で鋭い鉄の歯がついた「突棒（つくぼう）」、頭部がCの字型で鉄の歯がついた「袖搦（そでがらみ）」、これは着物を巻きつけて、動けなくする武器である。最後は「刺股（さすまた）」である。刺股は現在でも日本の警察や学校で非致死兵器として使用されている。